そう、凡ては負荷効力だ

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そう、凡ては負荷効力だ

【Ｎコード】
Ｎ９２３９Ｓ

【作者名】
カーテンコール

【あらすじ】
これは、あるひとりの、まいなすの、はなし。

プロローグ　あｋｄｄｆｇｒｊ

それは異様な光景だった。

白い学生服を着た独りの男が、大きな交差点の中央に座っていた。

日付は火曜、時刻は朝。

多くの会社員や労働者が通勤路として使う交差点に、そんな時間帯に座り込む。

話だけ聞けば、誰も彼もがその男を頭がおかしいか、自殺願望者と判断するであろう。

けれど。

「……は、は、は」

男……年の頃から見るに、青年と称すべきであろう彼は、重さのまるでない乾いた笑いを少しばかり零し。

徐に立ち上がると、くるりとひとつ、周りを見回し。

さも当然のように。

「み～んな、死んじまったかぁ」

自分を中心にして構築されている、余りにも大規模な事故現場を一瞥しながら。

無感動に、そう呟いた。

「失敗(ミス)った～、失敗(ミス)った～♪　どいつも、こいつも、運転失敗(ミス)って死んじゃった～♪」

調子外れで期待外れで平坦で淡々とした口調で奏でられる、お世辞にも上手いとは言えない歌声。

さも、どうでもいいような。

この光景が、彼にとってあたかも日常茶飯事であるかのような。

人としての温かみに欠け過ぎた、どこまでも不気味な歌声。

ふと、服の裾に砂が付いていたことに気付くと、それを軽く払った。

「あ～、手に血が付いてたの忘れてた」

白い服に、手形の形で付いてしまった赤い血。

気にもせず、青年はポケットからハンカチを取り出し、手に残った血を拭き取る。

「笑い草、笑い草。事故現場に駆け付けた警察(サツ)も消防も、揃い揃って仲良く事故って」

血を拭き取り終えたハンカチに、もう用はないと言わんばかりにライターで火を点け燃やし。

「事故現場に居た野次馬ちゃん等は、そいつに巻き込まれて一人残らず死んじゃって」

役目が済んだライターを放り捨てると、火が点いたままだったそれは横転したタンクローリーの方へと飛んで行き――

「おっとっと」

積んでいた燃料に引火し、辺り一面を一瞬で火の海へと変貌させた。

「失敗失敗、なんてミステイク。あ～あ、これでまた１００人くらい死んじゃうねぇ。まったく誰の所為だか、あぁ俺か」

自分を取り囲む業火にさえ際立った反応を示さず、青年は足下に置いた学生鞄を拾い上げると、軽く埃を払う。

「いてっ」

尖っていた金具に引っ掛け、指を軽く切る。

失敗(ミス)った～とぼやきながら、彼は切った指を口に含む。

唾液で血止めをした後、煙の立ち上る青空を仰いだ。

「え〜っと、太陽の位置的に……８時くらい？」

秒針の止まった、役に立たない時計を火の中に投げ捨て、青年はけらけらと笑った。

「おおう、遅刻だ。まあいいか」

踵を返すと、青年は歩き出す。

……この交通事故は、死者、負傷者合わせて２００人以上の被害を出した近年稀に見る大事故として、この後数週間に渡りニュースにて放映された。

せ、て、せててて、設定

名前　神戸（こうべ）　拐（かたる）だよ、一応ね

所属　箱庭学園３年十三組さ、今の所は

年齢　１８歳の筈だよ、勘違いしてなきゃ

血液型　ＡＢ型……？　よく知らないよ

利き手　左だったか？　右だったか？　忘れちまった

容姿　やや細身、身長は１７０少々。髪は踵付近まで伸び、４割ほどが灰色で残りは黒。肌は紙のように白く生気がない。顔のつくりは整っているが、１０００人中１０００人が不気味な印象を受ける……客観的に語ればこんな感じだね

過負荷名（マイナス）　詳細は教えてあげないよ

『負荷効力（ディス・イズ・ミス）』

こんなところかな

第1話　2647281545242（前書き）

冥加の台詞に翻訳入れました。

第1話　2647281545242

神戸拐（こうべかたる）は、箱庭学園に通う高校3年生である。

異形の如く長い髪と、同じく異形の如く白い肌を持つ、異形の如く不気味な雰囲気を醸し出す彼が所属するクラスは、十三組。

一、二、三、四組は普通科、五、七、九は体育科、六、八組は芸術科。

そして2桁のクラスに所属する生徒は全員が特待生（チームトクタイ）となっている。その中でも十三組は、他の特待クラスの中でも在籍する生徒の傾向が大きく異なる。

異常者。各学年の十三組生は、1人の例外も無く、世間一般では異常者と呼ばれる者達で構成されている。

そしてそこに所属する彼、神戸拐も異常者である。それが普通の異常であるかは、別として。

……彼の異常性については、いつか別の機会に語られるだろう。

「今日こそは……」

十三組生には様々な特権があり、他の特待生（チームトクタイ）同様に学費免除は勿論のこと、登校義務さえない。

故に十三組生の殆どは、学校に姿を現すことはなく。拐自身、同級生の顔も名前も、数人しか知らない。

その点で言えば、拐は例外的な十三組生であった。学生たる者学校に通わずしてどうすると、出来る限り毎日登校するよう努めていた。

正確には、『毎日登校しようとして殆ど出来ず仕舞い』ではあるが。

「今日こそは学校に……！」

そう。拐は、基本的に学園まで辿り着けない。

別に極度の方向音痴であるとか、そう言ったものはない。

彼がそうなってしまう理由は、主に先程のように、毎朝何らかの事故に巻き込まれるから。けれど今回は自身が無傷であったため、該当せず。

故に今日は、今日こそはと。

周囲に気を配らせ、こそこそと角を曲がる。

すると――

「……473？（ん？）」

「む」

角の死角から出てきたのは、なんの偶然か顔見知りであった。

無視するのも失礼なので、軽く挨拶を交わす。

「よう～、奇遇だな」

「574６３、２３７５６３４８２（お前か、久し振りだな）」

「いや、何て言ってるかは分からんけども」

容姿自体は可愛らしく、そして愛らしいもので。

何故かメイド服に身を包んだ、小柄な体型。

そして更に何故か、鎖に括った大きな鉄球を幾つも引きずりながら歩くという行い。

ついでに、手にはそれらの要素とミスマッチな、コンビニの袋。

最後のはともかく、明らかな異常者の風体。

この近辺を歩いていると偶に出会う、外見１５、６歳の少女だった。

ちなみに先程のように数字で言葉を発するため、拐は彼女の名前も知らない。

故に仮称として、数子（かずこ）と心の中で呼んでいる。

「４７３７４６５３５２、５９５３７２９６７５（どうかしたのか、考え込んでいるようだが）」

言葉どころか意思の疎通も全くできていないが、傍目には大分気さくな様子で拐に話しかけている数子（仮）。

拐は腕組みし、首を傾げつつも彼女の言わんとしていることを推理する。

「むむぅ～」

「１２８３９、０６４７６２４７４３？　６７８５９４６３２５６７？（どうした、疲れているのか？　昨晩はお楽しみだったのか？）」

「……成程～。取り合えず今言ったのが下ネタなのは分かった」

「４４３２（そうか）」

互いに言っていることが分からないので、基本彼女とのコミュニケーションはジェスチャー頼みとなる。

「見たところコンビニ帰りか？」

「７４８９３６２８６４８５６７４（糖分の補給活動だ）」

「プリンとシュークリームね、甘いもの大好きなのな～」

色々と推測するに、拐は数子（仮）を引きこもりの類と判断していた。

見かけるのも、決まってこうしてコンビニ等で買い出しをしている姿ぐらいのもので。

……別に外に出ることに抵抗を感じている訳では無さそうだが、何故引きこもりなどやっているのだろうか。

疑問と言えば疑問だが、聞くのも面倒なので聞いていない。

「３７９６５？（食べるか？）」

「食うかって？　いらね～、俺甘い物食えないし」

「……５３８（……待て）」

拐が首を振って見せると、数子（仮）はコンビニ袋の中をごそごそと漁り、何かを取り出した。

「４４２４６、７５７（これもあるぞ、好きだろう）」

「お～！　そいつは唐辛子煎餅！」

辛い物と煎餅。

拐の大好物である。２つを混ぜると、超好物にジョグレス進化する。

「２２、３７９６５？（どうする、食べるか？）」

「頂こう頂こう、ありがとさ～ん」

近場の公園にあったベンチで、一緒におやつにした。

ついでにそのまま、半日ほど一緒に遊んでいた。

「９４７５６（ではまたな）」

「お～う、そんじゃまたな～……あ゛」

別れた後に、登校途中だったことに気付いた。

その日も結局、学校には行けなかった。

第1話　2647281545242（後書き）

めだかボックスだと冥加が一番好きです。

第2話　xhsdtふげsk

今日も今日とて、学校に辿り着けない拐。

「やべえ、死ぬかも……」

気味の悪い容姿が人目を引いたのか、コンビニで屯していた不良十数人に絡まれ、抵抗する間もなくボコボコにされていた。

骨折複数、打撲無数。内臓破裂あり。

医者どころか、ブラック・ジャックを呼んで欲しい有り様だった。

「意識が遠のいていくよ〜、パトラッシュ……このまま俺は、死ん……死ん……」

すっと、ゆっくり閉じられていく瞼。

荒い呼吸がどんどん小さくなり、やがて聞こえなく――

「……じゃわないっ！　ハッハー、俺は不死身なのだ～！」

高らかに声を上げ、勢いのままに立ち上がる拐。

脚が折れているのに。

「ぐおぉ……迂闊だった……」

激痛により、再度倒れる。

「畜生～……満身創痍にも拘わらず渾身のギャグを放ったというのに、まさか誰も見ていないとは……何のために俺は身体を張ったんだ～」

友人に助けを求めようと、一瞬だけ思った。

しかし直後、友人など居ないことに気付いた。

やもすれば数子は友人にカテゴライズされるかもであったが、携帯の番号はおろか何を言ってるのかも分からない。

万事休す。万策尽きていた。

「こんな路地裏じゃあ人なんて通らないし……もういいや～、治るの待とう」

仕方ないので、待つことにしたらしい。

そんな拐の座右の銘は、『鳴かぬなら　ベガスで稼ごう　鳴呼無情』である。

意味が分かった人は挙手をしてほしい。そして、この場では何の関係もないことだと供述しておこう。

「や～れやれ。ホント、ミステイクだったな～。いつもの登校ルートが昨日の事故の所為で警察（サツ）に封鎖されてっから、こっちに来たら……」

ひたすらなリンチの嵐であった。異質なまでに異形で不気味な姿をした拐を、まるで怖れたかのような。

気性の荒い類に出会うと、拐はいつもこういった目に遭っていた。

傷付けられることに慣れ切ってしまうくらいに。

痛め付けられることに何も感じなくなるくらいに。

身体の何所かが痛いこと自体が、自分にとっての『普通』になってしまうくらいに。

呪詛のような罵詈雑言が右から左へ全て流れてしまうくらいに。

だから拐には、一切友達が居ない。居たことが無い。

数子に限っては、少々微妙ではあったが。

どれぐらいの時間が経ったか。

８度は意識を失った。そしてその都度、激痛に叩き起こされる形となった。

それは今も相変わらずで、打撲や切り傷が熱を伴った痛みを訴えかけてくる。

けれど。

「ん～……よ～し。そろそろ、内臓と脚の骨は治ったかな～」

ゆっくりと、そしてしっかりと拐は立ち上がる。

折れていた筈の脚は、２本揃ってしっかりと拐の身体を支えていた。

「……良好。腕とアバラは折れたまんまだけども」

おかしな方に曲がっている両腕を揺らさぬよう、猫背気味にゆっくりと歩き出す。

……姿勢を低くした所為で、ただでさえ地面に届きそうな長髪が完全に引き摺られる形となり――

「がふっ！？」

自分で髪を踏んでしまい、そのまま転んだ。

強かに頭を打ち付け、割れた額から一筋血が流れ出る。

前のめりに倒れた為、腕が下敷きとなり骨が更に粉々になったような異音と、焼けるような激痛が拐を襲う。

「てて……ま～た失敗(ミス)ったよ～」

が、絶叫するような痛みさえ、拐は軽く顔を顰めるのみ。

その痛みへの耐性が、彼の今まで受けた痛みの総量を物語っている。

「髪の毛のこと忘れてた……でもど～しよ、何かで結ぼうにも腕はこんなだし」

仕方なく、腕を庇いつつ起用に立ち上がると、頭を振って出来るだけ髪を背中に引っ掛ける。

多少は歩き易くなり、拐は先程よりもゆっくりと、足下に気を付けながら歩き出した。

何の気なしに空を見上げると、そろそろ日が沈みそうだった。

やはり今日も、学校には行けない。

第3話　sdgしjfkxhs

神戸拐は、虚弱である。

神戸拐は、脆弱である。

神戸拐は、軟弱である。

神戸拐は、薄弱である。

神戸拐は、貧弱である。

そんな神戸拐は、最弱である。

誰よりも弱く、誰であろうと勝てず。

負けることしか出来ない負け犬で、どこまでも最低な底辺であった。

神戸拐は、親の顔を知らない。

否、正確には覚えていない。

その外見の異形さゆえ４歳で両親に捨てられた彼は、以来泥水を啜り草を食み、１５歳になるまで野良犬同然の生活を送っていた。

神戸拐は今の保護者に拾われるまでは、字の読み書きはおろか言葉を話すことさえ満足にできなかった。

１１年間、汚い裏路地をねぐらとしていた彼は、似たような境遇の者達にとって見れば、ていの良いサンドバックだった。

殴られ、蹴られは日常茶飯事。酷い時には刃物で滅多刺しにされた。

しかしそれでも、神戸拐は今の保護者に拾われるその時まで、一切誰にも頼ることなく１１年間生き長らえていた。

己に降りかかる災難や事故を、凡て不可抗力だと思い続けて。

どんなことがあっても、自分だけは死にたくないと言う思いを抱え続けて。

神戸拐は。ただ耐え、生きていた。

ぼんやりと、意識が覚醒していく。

朝の目覚めを感じ、拐はベッドから半身を起こした。

「……」

両眼共々０．５しかない視力は、寝惚けていることもあって更に

ぼやけている。

拐は鈍い痛みを放つ腕で、ぐしぐしと目を擦る。

……先日の件で粉砕骨折した両腕には、ガチガチにテーピングがされている。そのお陰で痛みはあれど、何とか動かせるようにはなっていた。

ゆっくりと立ち上がり、固まった首を回す。

ベッドしか置かれていない、6畳の殺風景な部屋の隅にあるクローゼットまで歩くと、扉を開けた。

その中にずらりと並んでいる箱庭学園の制服のひとつを取り、緩い動作で袖を通した。

「……あ〜」

小さく口を開き、欠伸をかみ殺す。

「……へんなゆめ、みたな」

それは、あの人に拾われる前の自分が過ごした日々の夢だった。

人とはああも他人(ひと)に残酷になれるのかと、今にして思えば逆に感心してしまうような日々の夢だった。

夢にまで見るようなことじゃないのに、と。

ほんの少しだけ忌々しそうに呟くと、拐はベッドの下を漁って学生鞄を取り出した。

短い廊下を抜け、ダイニングキッチンに入る。

「おはよ〜……ってあれ、居ないし」

いつもなら椅子に座り、新聞を読みながら朝食を食べているあの人が居なかった。

テーブルには1人分の朝食が用意され、その横にメモ用紙が1枚。

『今朝は早くに出る』

力強くそれでいて整った、あの人の字でそう書かれていた。

「そっか～」

うむうむと納得し、拐は独り朝食を食べ始める。

それは多少冷めてはいたが、思い出してしまったあの日々の食事に比べれば、天と地の差であると拐は思った。

「いってきま～す」

鍵を閉め、家を後にする拐。

なんだか今日は、学校に行けるような気がした。

第４話　ｈｄふしｚｈづｆ

何かにつけて上手く行かないと言ってしまえば、それまでなのだろう。

その日、拐は珍しく学校に来れていた。

かれこれ２月（ふたつき）振りに目にした母校、箱庭学園。

余りの感動に、拐は校門の前で１０分近く泣いていた。

その間生徒達の好奇の目に晒される事となったが、そんな事は瑣末事で。

とにかく久方振りの登校に、とてもとても喜んでいた。

だが、今の状況はどうだろうか。

「死ぬ死ぬ～、死んじまうよ～」

中庭を歩いていた拐は、死に目に遭っていた。

理由は単純にして明快。猛獣が如き大型犬に襲われているのだ。

ガルルルァッ！！　ガルッ！！　ガウゥッ！！！

「うぎゃ～、出る出る！　内臓が出る～！」

軟弱な彼が犬に対抗出来る筈も無く。

先日の件で新調したばかりの制服はズタボロにされ、長い髪は砂で煤けていた。

やもすればこのまま、この犬に食い殺されてバッドエンドと言うことにも成り得る。

如何に拐が特異とは言えど、それはちょっと嫌だった。

死因ぐらい選びたい。

「の～！」

ガグァァァァァァァッ！！！！！

悲痛な叫びを出す拐。

そんな声が天に届いたのか。

「めだかちゃん、こっちだ……ってぇ！？　人が襲われてるぅぅぅっ！！！！！」

中々のタイミングで、助け船を出してくれた。

「いや助かったわ～、ホント助かったわ～。危うくあのまま食われるとこだったわ～」

場所は変わり、生徒会室。

拐は出されたお茶を飲みながら、目の前の2人を見据えていた。

「あーいえ、こっちこそ済みませんでした。俺達がさっさとあの犬を捕まえてりゃ、こんな事にはならなかったんですから」

「……うむ……そうだ……気にすることはない、神戸3年生……」

ばつが悪そうに頭を掻いている、短髪の男子生徒。

机の上に横たわり、ものすごく落ち込んでいる女子生徒。

……何故か、犬のきぐるみを着ている。

「……？」

お茶を啜りつつ、器用に首を傾げる拐。

聞くところによると、この2人は今期の新しい生徒会メンバーらしい。

短髪の方は1年一組の人吉善吉（ひとよしぜんきち）。役職は生徒会庶務。

きぐるみの方は1年十三組の黒神（くろかみ）めだか。彼女が今期の生徒会長らしい。

成程確かに、ただならない雰囲気を纏っていると。そう思った。

けれど。

「彼女はど～して落ち込んでるの？　後ど～してきぐるみ？」

「……動物に懐いてもらえなかったからですよ。きぐるみに関しては聞かないで下さい……」

「あんな可愛らしいワンちゃんにも懐いてもらえないなんて……

…私はどうしようもなく駄目な人間だ……」

「いいじゃねえかよめだかちゃん。結果としてボルゾイ君は無事に投書主の所に帰ったんだから……約1名食われかけたけど」

最後の一言は小声だったが、ばっちり拐の耳にまで届いていた。

……しかし。

「生徒の悩み相談を何でも聞く『目安箱（めだかボックス）』、ね……今期はそんなことやってんだ～」

そもそも拐は年に数回しか学校に辿り着けないゆえ、毎年何をやっているか知らず仕舞いだった事の方が圧倒的に多いが。

特に前期の生徒会など、会長が誰であったかも思い出せない始末である。

「あれ、神戸先輩知らないんですか？　めだかちゃんが生徒総会であれだけ大々的に宣伝してましたけど」

「多分その日は学校に辿り着けなかったよ～」

「辿り着けなかったって……」

黒神めだかが落ち込んでいて使い物にならない為、拐への受け答えをこなす人吉善吉。

……意識か無意識か、その背に僅かな悪寒を潜ませながら。

それを気の所為だと思いつつも。

神戸拐と生徒会の、最初の邂逅。

今この時、後に彼らが対立することは。

もう、決まっていた事だったのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9239s/

そう、凡ては負荷効力だ

2011年5月29日21時22分発行